

自然の循環の中に生きる



NPO法人 森は海の恋人 理事長

はたけやま しげあつ
富士 重篤

1943年生まれ。高校卒業後、カキ、ホタテ養殖業に従事。1989年から「森は海の恋人」運動として植林を始め、環境教育や環境保全事業にも活動を広げる。京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授。2012年に国連「フォレスト・ヒーローズ」選出。著書に『日本〈汽水〉紀行』など多数。

■ 地域から生まれた「森は海の恋人」運動

漁師である私たちが山に木を植え続けて、今年で30年になります。40年ほど前、気仙沼湾が深刻な汚染に見舞われ、湾の奥にある舞根地区でわれわれ漁師の営むカキ養殖場も大きな被害を受けたことがきっかけでした。

カキは川と海が混じり合う汽水域でしか育たないことから、川の環境がカキに直接影響を及ぼします。当時は、工場や家庭からの廃水が川に流れ込んでいました。川をきれいにするにはどうするか——。川の流域の方たちに、川と海も含め、自然はすべてつながって

いることを理解していただくために、上流の山に木を植えて落葉広葉樹の森をつくらうと考え、漁師仲間と動きだしました。

まずは、気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根山に植樹をしたいと、室根村（当時）にお願いしました。室根山は標高約900m、気仙沼港から20kmほど北西の岩手県にあるこの辺りで一番高い山で、昔から沖へ出た漁師が目印としてきた大切な山です。また、山には1300年続く室根神社があり、旧暦閏年の翌年に行われる特別大祭では、祭りの様々な役目「神役」のほとんどを農家が担う中、唯一、海辺の舞根の漁師がお清めの海水を汲み捧げる神役を任されています。このように室根と舞根は古くから親交が深いこともあり、協力を得ることができました。

植樹活動にあたってスローガンを考えている時、多くの歌人を輩出している気仙沼の土地柄から、明治から昭和の農民歌人、熊谷武雄の「手長野に木々はあれどもたらちねのははそのかげは拠るにしたしき」という歌に出会いました。「ははそ（柞）」とは、クヌギやナラなど落葉広葉樹をさす古語で、気仙沼の手長山にはいろいろな木があるけれど、ナラやクヌギの森はお母さんのそばにいるように心が安まるよ、という意味です。私たちがつくるうとして森を、昔の人は母にたとえていたのです。この「柞」という言葉に強く惹かれた私は、熊谷武雄の孫と同じく歌人の熊谷龍子さんに協力をお願いし、「森は海を海は森を恋いながら 悠久よりの愛紡ぎゆ

く」の一首を寄せていただき、ここから「森は海の恋人」というスローガンが生まれました。

1989年から始まったこの植林活動は、「森は海の恋人植樹祭」として大川流域の方々にも参加いただき、毎年続けています。

活動を開始した翌年、「柞」が海にも関係することが科学的に判明しました。落葉広葉樹の腐葉土からフルボ酸という物質が発生し、自然界にある鉄分と結び付いてフルボ酸鉄となって川から海に流れ込み、海藻やカキのエサである植物プランクトンの生長に必要な鉄分を供給していることを、北海道大学の研究から知りました。森と川、海はつながっていたのです。

■ 心に木を植える

木を植えるだけでは、川の流域の方たちもつ自然のつながりに対する意識は変わらないかもしれない、という思いから、子どもたちへの環境教育が重要だと気づき、1990年から体験学習をスタートさせました。

大川上流の小学校の子どもたちを海に招き、カキやホタテを食べさせたり、プランクトンを顕微鏡で見せたり。カキ養殖の作業も体験させました。カキは海水の植物プランクトンを食べて大きくなるんだよと話し、海水を飲ませてみました。海水だからしょっぱいけれど、植物プランクトンが凝縮しているから青臭い。農家の子どもたちは、キュウリの味がすると言いました。川から流れてきたものを最初に体に取り込む植物プランクトンを飲む

る
船で和船を漕ぐコツを教えてください、
体験学習の子どもたち。



ことは、人間の営みの結果を飲むことだと実感してもらおうのです。そして、食物連鎖や水俣病へと話を進めました。海辺で生きものを見て触って味わいながら話を聞く子どもたちの目は、みんないきいきとしています。

こうして川の上流と下流の自然のしくみを学んだ子どもたちは、家に帰って「農業を少しだけ減らして」と頼むなど、子どもたちなりに考えたことを親に伝えます。こうしたことがきっかけとなって、農業の在り方を大人同士が話し合い、それが行政へも伝わり、環境保全型農業にしようなどと発展していきま

した。森を整えることで川がきれいになり海が豊かになれば、農業も漁業もさかんになり、経済も回ることもつながっていきます。

子どもたちには、自然の恵みを受けている人間も自然の循環の中にあること、そして、ひとり一人の意識が自然に大きく関わっていることを、森と川と海のつながりを通して伝えていきたいと思っています。体験学習にはこれまでに1万人以上が訪れ、中にはプランクTONの研究になった子もいます。

私たちは山に木を植えているけれど、言葉を変えれば、人々の心に木を植えているのだと思っています。

植樹を始めて15年ほど経ったころ、姿を消していたウナギが少しずつ現れ、震災前にはだ

ぶ増えてきていました。

■ 真実の恋人たち

2011年3月、津波は気仙沼湾の奥にあるここ舞根にも押し寄せ、高台にあるわが家と数軒を残し、地区のほとんどの家とカキやホタテの養殖場、水産加工場のすべてが津波で流されました。舞根湾には海の生きものは一切見えなくなり、絶望しかありませんでした。油や瓦礫が混ざり合った真つ黒な水が津波となって湾を飲み込んだのですから、もうこれで海は死んだと思いました。

津波の2か月後のこと、私たちの活動もとに「森里海連環学」という新しい学問をつくって研究を続けている京都大学の先生方が、舞根湾の水質検査にきました。海の食物連鎖の出発点である最も重要な植物プランクTONを調べてもらったところ、「カキが食い切れないほどの植物プランクTONがいます」とおっしゃるのです。「森と川の環境を整えていたことがこの海の早い復旧につながった。『森は海の恋人』は真実です」と。科学者の言う「食いつけないほど」とは、漁師の心根を汲んでくれたありがたい言葉だと思っています。

その後、国の補助や各方面から支援をいただき、養殖場や水産加工場を再建することができました。豊かな森と川のおかげで海の環境も蘇り、地区で協業としてカキやホタテの養殖、加工業を再開、漁業も復活しました。

舞根の海は今、より豊かな汽水域を取り戻しています。地震で海近くの水田が80cm沈み、

潮が入った湿地帯にはウナギやハゼが棲み、カワセミもやってきます。ここが新たな生きものを育む場所となり、海にもよい影響を与えています。舞根地区住民の総意で防潮堤をつくらず、美しく豊かな環境を守っていくことを決めました。

■ 復活の海で思うこと

私は、地理好きの旅行少年でした。幼いころからカキの育つ海、川、山を見て育ち、仕事で国内外のカキの漁場を巡ってきたことで、物事を大きくとらえる視野をもつことができました。今も講演で全国各地に出かけています。民俗学者の宮本常一にならって、訪れた土地ではまず、できるだけ高いところへ上がり、地理的条件を俯瞰して見ることから始めています。私たちの活動でも、彼から多くを学んできました。

自然を知るためには、地図は重要です。日本を地図で見ると、国土の中心にある脊梁山脈から3万を超える大小の河川が毛細血管のように流れ、四方の海に注いでいます。いわば沿岸すべてが汽水域です。川を堰き止めず、流域を自然に近い形にすれば疲弊した海も蘇ります。豊かな山や海の恵みを使った和食文化を通じて、自然を大切にしている日本人の姿勢を世界に発信することもできます。自然を守るためには、広い視点から日本のグランドデザインを考えることが根底にあるべきだと思います。

この記事はインタビューをもとに作成しました